

## 海外では

様々な民族が1つの国の中で暮らすためには、知恵と工夫が求められる。かたちは違って共通して見えてくるのは相手のもつ文化を尊重すること。



### イギリス

#### それでも失わない「らしさ」

NEC Europe 小林規一

#### 社会も職場も多国籍

イギリスに住んでいると、異なる文化や考え方をもちた人と接する機会が多い。旧植民地だったインドや中東、アジアなど様々な国出身の人々が生活している。職場の部門長も経理はイギリス人、人事はイタリア人、法務はスペイン人、購買はオランダ人と多国籍である。

多文化環境の欧州で暮らす中で感じるのは、文化的感受性(cultural sensitivity)の高い人が多いことだ。欧州には戦争や植民地支配を含めた長く複雑な歴史があり、その中で多文化共生の意識が培われてきたのだろう。特にイギリスは世界中に植民地をもっていた背景もあり、移民を含め外国人に同化を強いるのではなく、異なる文化や考え方を尊重しながら社会のまとまりをつくるという多文化主義(multiculturalism)が政府、社会、個人の各レベルで実践されている。

そもそもイギリスの成り立ちが、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの連合王国(United Kingdom)で、国家のアイデンティティ自体が多文化を前提にしてお

り、国旗も各王国のそれを重ねたものだ。政府機関でも大臣やロンドンを含む地方自治体のトップが非白人であることは珍しくない。先日、政府から受け取ったコロナワクチン接種の通知には、予約方法の説明が英語以外にインド、中東、中国、東欧などの16言語で併記されていた。また、最近実施された国勢調査で驚いたのは、LGBTに関する質問が設けられたこと。政府が人種や言語、宗教以外の多様性の理解に努めようとする姿勢を感じた。

